

小学校特別支援教育コーディネーターの学級担任支援の意識に関する調査研究

保坂 俊介

I 問題と目的

インクルーシブ教育システム構築において、特別支援教育コーディネーターには、学校全体の教員の資質能力の向上に指導的な役割を果たすことが期待されており、その専門性を高めるための方策について、今後検討していくことが必要である（文部科学省，2012）。特別支援教育コーディネーターの役割について、①校内の関係者や関係機関との連絡調整、②保護者に対する相談窓口、③担任への支援、④巡回相談や専門家チームとの連携、⑤校内委員会での推進役の5つが示されている（文部科学省，2004）が、「担任への支援」が、今後一層重要であると考えられる。学級担任支援について、先行研究では、支援の内容に関する研究（宮木・木船，2010）等が報告されているが、特別支援教育コーディネーターの学級担任支援の実践の基盤となる意識の構造や影響を及ぼす要因について整理した研究は見当たらない。

また、特別支援教育コーディネーターが明確に校務分掌に位置付けられるようになってから10年目を経過したところであり、学級担任支援に関する専門性の蓄積が十分とは言い難い。先行研究では、学級担任支援に対して、特別支援教育コーディネーターは、悩みを抱えていることが報告されている（渡辺・姉崎 2011）。そのような中、10年以上の特別支援教育コーディネーター経験のある熟練教員の学級担任支援の実践を明らかにすることは、特別支援教育コーディネーター経験年数の浅い教員に対して、目指すべき学級担任支援のあり方に関する1つの知見を提供するものになるのではないかと考えられる。これらを明らかにすることによって、小学校特別支援教育コーディネーターの学級担任支援に関する専門性を高める方策について検討するための基礎的な知見を得るこ

とができると考えられる。なお、本研究を進めるにあたり、対象となる学校の校長と教員からの研究協力の承諾と学内の研究倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号 2016-31）。

II 研究1

1 目的

小学校特別支援教育コーディネーターの学級担任支援の意識及び、意識に影響を及ぼす要因について明らかにする。

2 対象・手続き

調査協力可能と回答のあった甲信越地域の公立小学校の特別支援教育コーディネーター138名を対象とし、郵送による質問紙調査を実施した。

3 質問項目

①フェイスシート、②学級担任支援の意識、③職務環境について回答を求めた。

4 分析の方法

①は選択回答数を集計、②③は因子分析、②については一元配置分散分析を行った。また、②を従属変数、③を独立変数として重回帰分析を行った。なお、統計処理には総計ソフト「IBM SPSS Statistics22」を用いた。

5 結果と考察

121名から回答が得られた（回収率 87.7%）。98名を有効回答とした。小学校特別支援教育コーディネーターの学級担任支援の意識として、第I因子「学級担任支援に関する不安」（ $\alpha=.898$ ）、第II因子「学級担任支援に関する自信や自己有用感」（ $\alpha=.858$ ）、第III因子「学級担任支援に関する抵抗感」（ $\alpha=.815$ ）、第IV因子「学級担任支援に関する多忙感」（ $\alpha=.692$ ）、第V因子「学級担任支援に関する悩み」（ $\alpha=.652$ ）、第VI因子「職務中心性」（ $\alpha=.614$ ）の6つの因子が抽出された（表1）。また、勤務する学校の職務環境として、第I因子

表1 小学校特別支援教育コーディネーターの学級担任支援の意識の因子分析結果（主因子法・Promax 回転）

	因子					
	I	II	III	IV	V	VI
1 学級担任が悩みを相談してきた時に、学級担任のニーズに応じた支援が行えているか不安に思う。	.868	.275	.016	-.089	.147	-.093
21 自分が行う学級担任支援は効果があるのか不安である。	.791	-.029	.028	.116	.029	-.009
22 特別な支援を必要とする児童の指導に関する適切な情報を学級担任に伝えられているか不安に思う。	.772	-.097	-.096	.043	-.015	.067
5 学級担任を支援する際に、特別支援教育コーディネーターとして力量不足を感じる。	.765	-.100	-.112	.015	-.012	-.108
4 自分が行っている学級担任支援が、校内の教職員からどう評価されているのか気になる。	.628	.242	.092	.028	.182	.198
10 学級担任に特別支援教育に関する助言を行うことに自信がある。(R)	.496	-.408	.088	-.043	-.153	-.030
9 特別支援教育コーディネーターとして、学級担任支援の業務を担うことに不安を感じる。	.460	-.270	.084	.214	-.005	-.068
17 学級担任支援と特別支援教育コーディネーターの他の業務との両立ができるか不安に思う。	.434	-.174	.120	.317	.020	.092
28 学級担任に提供できる校外のリソースについて把握している。	.102	.769	-.094	.009	-.075	-.107
25 学級担任に提供できる校内のリソースについて把握している。	-.013	.738	-.056	.005	.047	-.043
30 特別支援教育コーディネーターとして、適切な情報を学級担任へ提供できている。	-.211	.654	.332	.048	-.325	-.024
3 特別な支援を必要とする児童の指導に悩んでいる学級担任の悩みの原因が何か、判断できる。	-.188	.645	.069	.113	.033	-.185
23 学級担任を支援することにやりがいを感じる。	.098	.609	-.046	-.250	.025	.201
2 特別支援教育コーディネーターとして学級担任を支援することは、自分の成長に繋がっている。	.268	.582	.017	-.408	-.069	.066
16 学級担任を支援するために自分の力量を高める努力をしている。	.220	.565	.023	-.094	-.132	.000
29 自分が行った支援によって、学級担任の教師としての成長がみられたと感じる。	-.255	.551	.096	.053	-.065	.217
34 自分の学級担任支援の方法が確立している。	-.097	.453	-.344	.305	.143	.020
24 自分より年齢の高い学級担任に支援を行うことに抵抗がある。	-.053	.103	.890	.007	.153	-.033
20 自分より特別支援教育の経験の長い学級担任に支援を行うことに抵抗がある。	.030	-.052	.718	.055	-.104	.073
19 学級担任が行う指導や対応に対して助言・援助を行うことにためらいがある。	.071	-.085	.570	.059	.342	-.089
6 特別支援教育コーディネーターとして学級担任支援を行うことによる多忙感が大きい。	.293	.159	.046	.757	-.188	.105
35 学級担任からの要求が多く負担を感じる。	-.068	-.145	.013	.664	.117	.126
8 他の校務分掌との兼務や特別支援教育コーディネーターとしての他の業務が多く、学級担任支援まで手が回らない。	.339	-.043	.022	.430	-.211	-.040
11 特別な支援を必要とする児童の実態について、学級担任と共通理解ができない。	.082	-.094	-.024	-.050	.715	-.119
33 学級担任を支援することに関して相談をする相手がいない。	.011	-.310	.139	-.110	.499	.093
13 助言・援助を行った学級担任との人間関係が崩れないか不安である。	.057	.059	.395	.015	.491	.077
15 学級担任支援よりもっと重要な特別支援教育コーディネーターとしての職務があると感じる。(R)	.013	-.190	-.002	-.342	-.130	.652
18 特別支援教育コーディネーターの職務の中で、学級担任支援に最も多く時間を使っている。	-.175	-.026	-.032	.390	-.041	.577
26 学級担任が特別な支援を必要とする児童に対して適切に指導できるようになるかどうかは、自分の責任であると感じる。	.059	.036	-.135	.113	.294	.541
12 学級担任支援は、特別支援教育コーディネーターの中心的な職務であると捉えている。	.011	.037	.117	.082	-.102	.521

(R) 逆転項目

表2 小学校特別支援教育コーディネーターの勤務する学校の職務環境の因子分析結果（最尤法・Promax 回転）

	因子	
	I	II
8 私の学校では、特別支援教育コーディネーターが校外の研修に参加しやすい配慮や雰囲気がある。	.817	-.150
6 特別支援教育コーディネーターとして仕事をする際、管理職は積極的にサポートしてくれる。	.651	.175
7 特別支援教育コーディネーターとして仕事をする際、学級担任は積極的にサポートしてくれる。	.601	.092
5 私は、特別支援教育コーディネーターとしての業務が行いやすいように、校務分掌や授業時数等で配慮を受けている	.507	-.052
9 私の学校には、特別支援教育コーディネーターとしての業務で困った時に、相談できる相手がいる。	.410	.090
4 私は、特別支援教育コーディネーターとして、学級担任から適正に評価されている。	-.079	1.031
3 私は、特別支援教育コーディネーターとして管理職から適正に評価されている。	.094	.734

「校内の職員からの職務に対する理解や配慮」($\alpha = .736$)、第II因子「校内の職員からの適正な評価」($\alpha = .865$)の2つの因子が抽出された(表2)。学級担任支援の意識に影響を及ぼす要因として、一

元配置分散分析の結果、「年齢」、「教職経験年数」、「特別支援教育コーディネーターの経験年数」、「当校での特別支援教育コーディネーターの経験年数」、「特別支援教育の経験年数」、「特別支援教育に関する研修会の参加回数」、「特別支援教育コーディネーター研修会の参加回数」、「校務分掌の有無」による影響が認められた。特に、特別支援教育コーディネーターの経験年数は、「学級担任支援に関する不安」、「学級担任支援に関する自信や自己有用感」、「学級担任支援に関する悩み」の3つの意識に、特別支援教育コーディネーター研修会の参加回数は、「学級担任支援に関する不安」、「学級担任支援に関する自信や自己有用感」、「学級担任支援に関する抵抗感」、「学級担任支援に関する悩み」の4つの意識にと、学級担任支援の意識構造に大きく影響を与える要因であることが考えられる。

さらに、重回帰分析の結果、職務環境因子Ⅰは、学級担任支援の意識因子Ⅲ ($\beta = -.282, p < .01$)、因子Ⅳ ($\beta = -.296, p < .01$)、因子Ⅴ ($\beta = -.284, p < .01$)に負の影響、職務環境因子Ⅱは、学級担任支援の意識因子Ⅱ ($\beta = .550, p < .001$)に正の影響、因子Ⅰ ($\beta = -.435, p < .001$)、因子Ⅲ ($\beta = -.210, p < .05$)、因子Ⅴ ($\beta = -.234, p < .05$)に負の影響を及ぼしていた。校内の職員からの職務に対する理解や配慮があることにより、小学校特別支援教育コーディネーターの学級担任支援に関する抵抗感や多忙感、悩みは軽減され、校内の職員からの適正な評価を受けることにより、学級担任支援に対する自信や有用感が高まり、不安や抵抗感、悩みは軽減すると考えられる。

Ⅲ 研究2

1 目的

熟練の特別支援教育コーディネーターの学級担任支援の実態及び、支援を行う際の工夫・成果・課題について明らかにする。

2 対象・手続き

10年以上の特別支援教育コーディネーター経験のある熟練の小学校特別支援教育コーディネーター

1名を対象とした半構造化面接を実施した。

3 質問項目

①学級担任支援の具体的な取組、②学級担任支援に取り組む際の工夫・成果・課題、③学級担任支援に有効な現職研修について回答を求めた。

4 分析の方法

面接内容を逐語録化し、定性的コーディング(佐藤, 2008)を参考に行った。以下、本文中では、概念名を【 】, オープンコードを〈 〉で示す。

5 結果と考察

小学校特別支援教育コーディネーターの学級担任支援の実態及び、支援を行う際の工夫・成果・課題等について、36のオープンコードとそれらの組み合わせからなる12の概念が抽出された(表3)。

【学級担任支援のきっかけ】では、対象の教員は、特別支援教育コーディネーターとして、〈支援を要する学級や教員への介入〉から、〈学級担任から上がってくる困り感への対応〉に変化しているという語りが得られた。このことから、自身の学級担任支援の実践の振り返りを行い、より良い学級担任との関わり方について、工夫をしていると推察される。【学級担任支援の内容】では、〈学級担任の困り感を吸い上げ情動的に寄り添う〉、〈特別支援教育の動向について校内へ発信する〉、〈研修会で得た情報を校内へ発信する〉といった、宮木(2013)の「情緒的サポート」や「道具的サポート」と同様の支援が実践されていた。また、【学級担任支援の方法】についても〈学級担任と一緒に児童の支援について検討する〉や〈学級担任のニーズに合った研修会を企画する〉等、宮木・木船(2010)の示す「手伝う」支援や「提供する」という支援にあたる方法で、支援が行われていた。

【学級担任支援の工夫】は、〈学級担任と児童の実態に合ったプランを提供する〉、〈学級担任のもつ良さや専門性を引き出し生かす〉等、学級担任の実態に応じて支援を行うものであり、これらについても、自身の実践の振り返りから培われてきたと考えられる。研修会において専門知識を担保することや、特別支援教育コーディネーターとし

て蓄積した経験を振り返る機会の確保が重要であると考えられる。

表3 定性的コーディング結果

【概念】	(オープンコード)
学級担任支援のきっかけ	支援を要する学級や教員への介入 学級担任から上がってくる困り感への対応 学年主任からの情報提供
学級担任支援の内容	学級担任の困り感を吸い上げ心情的に寄り添う 特別支援教育の動向について校内へ発信する 研修会で得た情報を校内へ発信する
学級担任支援の方法	学級担任と一緒に児童の支援について検討する 児童の支援に対する評価を行う 支援に対する評価を踏まえ次の支援方策を検討する 学級担任のニーズに合った研修会を企画する
学級担任支援の工夫	学級担任の児童の支援に関する引き出しを増やす 学級担任と児童の実態に合ったプランを提供する 実践する教員に主体性をもたせる 学級担任の望む方向へ主体的に向かわせていく 学級担任のもつ良さや専門性を引き出し生かす
学級担任支援の成果	児童の学力や学習意欲の向上 児童の社会性の向上 児童の問題行動の改善 通常学級での特別支援教育の浸透 通常学級と通級指導教室の連携体制について学ぶ
学級担任支援の課題	時間の確保 学級担任とのより良い連携の方法 学級担任の多忙との兼ね合い
学級担任支援に役立った研修会の内容	ユニバーサルデザインに関する研修会 ICTに関する研修会
今後実施したい研修会の内容	個別の指導計画に関する研修会
今後受講したい研修会の内容	インクルーシブ教育システムの将来像 アクティブラーニングとカリキュラムマネジメント 新学習指導要領における特別支援教育の在り方 と展望
特別支援教育コーディネーターに必要な専門性	チームをマネジメントする力 発達障害等の障害に関する知識
学級担任支援に対する思い	学級担任を成長させる意識
校内の体制作り	個別の指導計画の作成を校内で進める 全校共通の教材やルールを揃える 教員間で組織的に動く体制作り ユニバーサルデザインの実践

IV 総合考察

研究1では、特別支援教育コーディネーターの学級担任支援の意識に対して、特に特別支援教育

コーディネーターの経験年数、特別支援教育コーディネーター研修会の参加回数が影響を及ぼすことが明らかとなった。研究2では、特別支援教育コーディネーターとして経験した実践を振り返ることが、次の学級担任支援における工夫につながっていた。これらのことから、特別支援教育コーディネーターが、特別支援教育に関する研修会や特別支援教育コーディネーター研修会への参加を重ね、専門知識を担保することや、地域の複数の特別支援教育コーディネーターが、互いの実践を振り返り、検討し合える研修会の場が設置されることが意義のあるものと考えられる。また、研修機会を確保される等の職務環境は、学級担任支援に関する不安や抵抗感、多忙感や悩みを軽減させることや、自信や有用感をもって、学級担任支援を行う上でも有効であると考えられる。

文献

- 宮木秀雄 (2013) 特別支援教育コーディネーターからの支援による学級担任の認知の変容に関する研究. 広島大学大学院学位論文要旨, 1-12.
- 宮木秀雄・木船憲幸 (2010) 特別支援教育コーディネーターが通常の学級担任に対して行う支援の内容に関する研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 1, 学習開発関連領域, 59, 141-150.
- 文部科学省 (2004) 小・中学校におけるLD (学習障害), ADHD (注意欠陥/多動性障害), 高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン (試案). 2004年1月, (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1298152.htm) (2016年12月8日)
- 文部科学省 (2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告). 2012年7月23日, (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm) (2016年12月8日)
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法. 新陽社.
- 渡辺雅子・姉崎弘 (2011) 小学校の通常学級における発達障害児への支援 -特別支援教育コーディネーターによる担任教師への支援の視点から-. 三重大学教育学部研究紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, 62, 161-167.